

保護者を対象とした青少年の万引き防止のための 教育プログラムの開発と実践

岡田 涼 ・ 時岡 晴美 ・ 大久保 智生 ・ 七條 正典 ・ 松浦 隆夫*
(発達臨床) (人間環境教育) (学校教育) (附属教育実践総合センター)(香川県警察本部少年課)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*760-8579 高松市番町4-1-10 香川県警察本部少年課

Development and a Practice of Educational Program for Parents toward Prevention of Students' Shoplifting

Ryo Okada, Harumi Tokioka, Tomoo Okubo, Masanori Shichijo
and Takao Matsuura*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Juvenile Section, Kagawa Prefectural Police Headquarters, 4-1-10 Ban-cho, Takamatsu 760-8579*

要 旨 本論文では、保護者を対象に青少年の万引き防止のための教育プログラムを作成し、その実践事例を報告した。教育プログラムでは、①万引きに関する正しい知識を獲得すること、②万引きをした少年とその保護者の背景について自ら考えること、という2つの要素を柱とした。参加者は、小学生の保護者115名であった。プログラムを通して、参加者は青少年の万引きに関する知識を身に付け、保護者の役割について考えることができた。

キーワード 万引き防止 教育プログラム 保護者 万引き防止啓発動画

問題と目的

青少年の問題行動を考えると、保護者の役割は重要である。これまで、親や保護者との関係が青少年の問題行動や非行に影響することが明らかにされている(小林, 2008)。問題行動への対応は、問題行動を示す青少年本人に注目するだけでなく、保護者との関係のなかで考えていくことが不可欠である。

青少年がかかわる重大な問題行動の1つとし

て万引きがある。これまで青少年の万引きは非行行為や犯罪行為の一側面として扱われており(小林, 2003; 小保方・無藤, 2006)、個別の問題として取り上げた研究は少ない。その傾向は海外でも同様であり、Krasnovsky & Lane (1998)は、万引きが重大な犯罪ではないという印象をもたれているためであると指摘している。しかし、万引きは初発型非行やゲートウェイ犯罪といわれ、より重大な非行や犯罪の入り口となりやすいとされている。そのため、万引

きがつ独自の特徴を十分に理解したうえで、その予防や抑止のための対策を考えていくことが重要である。

香川県では万引き対策が喫緊の課題となっている（大久保，2012）。人口比あたりの万引き認知件数について、香川県は2002年から2009年の7年間連続でワースト1位であり、万引きの多い県として知られている。このことを受けて、平成22年度に香川県警察と香川大学の共同事業として「子ども安全・安心万引き防止対策事業」が立ち上がり、県内の万引きの実態把握や万引きの背景要因に関する調査、万引き防止のための啓発動画の作成などが進められている。

青少年の万引き防止のための対策として、教育プログラムの有効性が報告されている。岡田・大久保・時岡・七條・松浦・大前・三好（2013）は、中学生を対象とした万引き防止のための教育プログラムの実践例を報告している。この教育プログラムでは、万引きに関する正しい知識を獲得することと、万引きの背景と対策を自ら考えることを中心的な要素としている。青少年の万引きにおいては、友人の影響が大きいことから（大久保・堀江・松浦・松永・江村，印刷中；大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡，2012），プログラムでは友人関係のなかで生じる万引きのショートストーリーをもとに、生徒に万引きの背景や対応について自ら考えさせることを重視している。その結果、プログラムを受けた効果として、生徒は万引きに関する様々な事実に実感し、自分が万引きをしないという効力感や万引きのない地域づくりに関する肯定的な態度を示していた。岡田他（2013）の報告は、青少年本人を対象として万引きに関する教育的働きかけを行うことの重要性を示唆するものである。

一方で、青少年の万引き防止を考えるうえで、保護者の役割にも目を向けることが不可欠である。これまで、青少年を対象とした調査から、保護者との関係が様々なかたちで青少年の万引きに影響することが明らかにされている。大久保・堀江・松浦・松永・宮前・宮前・岡

田・七條（2012）は、一般の青少年を対象とした調査で、家族との関係が良好であるほど万引きに関する規範意識が高いことを明らかにしている。また、小保方・無藤（2005）は、一般の中学1年生において、両親との良好な関係が万引きを含む非行傾向行為を抑制することを示している。さらに、青少年の万引き被疑者を対象とした調査でも、家族からの否定的反応を予測したもののほど強く後悔を感じることが報告されている（大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富他，2012）。

保護者との関係が青少年の万引きに影響していることを考えれば、保護者に対する取り組みも重要な意味をもつ。日頃からの子どもへの関わり方や、子どもが万引きをしてしまった際の対応の仕方は、青少年の万引き防止や再犯の抑止に影響すると考えられる。大久保・杉本・常田・高橋・岡田・時岡（印刷中）は、未成年の子どもをもつ保護者を対象に、万引きへの対応の仕方を調査している。その結果、自分の子どもや自分自身に万引きの経験がある保護者に比べて、経験がない保護者は、もし仮に子どもが万引きをした場合にその事実を受け入れたいと考えやすいことが示されている。この結果は、万引きに関する知識のあり方が、子どもの万引きへの対応に影響し得ることを示している。しかし、一般的に、保護者は万引きに関して正確な知識をもっていないことも明らかにされており（大久保・杉本・時岡・常田・西原，2012），実際に子どもが万引きをした際に適切な対応をとることは多くの保護者にとって容易ではないと推察される。そのため、一般の保護者に対して、万引きに関する知識を伝え、適切な対応の仕方について考えてもらう場を提供することが万引き防止にとって重要であると考えられる。

ただし、保護者に対する取り組みにおいて、万引きに関する規範意識だけに特化したものは有効ではないと考えられる。一般の青少年においても万引きを行った青少年においても、万引きに関する規範意識は概して高いことが明らかにされている（大久保・堀江・松浦・松永・江

村, 印刷中; 大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富他, 2012)。また, 保護者自身も万引きに関して高い規範意識をもっている(大久保・杉本・時岡他, 2012)。そのため, 万引きは悪いことであるという規範意識を取り上げ, それを子どもに伝えるように促すだけでは, 有効な試みとならないと考えられる。

また, 保護者に対して万引きに関する教育的働きかけを行うことは, 保護者が子どもとの関係について考える機会を提供する意味でも重要となる。保護者と子どもとの関係は, 一方的に保護者が子どもに影響を与えるのではなく, 子どもの変化や働きかけによって保護者自身も変化するという面もある(戸田, 2009)。朴(2012)は, 保護者は子育ての中で, 自分自身や子ども, 他の保護者に関する情報を得ることで, 自身の子育てを省察することの重要性を指摘している。子どもの万引きは, 保護者に対してもインパクトの大きい出来事であるため, 保護者自身が子どもとの関係を振り返り, 見つめ直すきっかけにもなり得るものと考えられる。

以上のことを踏まえ, 本論文では保護者を対象とした青少年の万引き防止のための教育プログラムを作成した実践例を報告する。教育プログラムでは, ①万引きに関する正しい知識を獲得すること, ②万引きをした少年とその保護者の背景について自ら考えること, という2つの要素を柱とする。まず, 万引きに関する正しい知識を獲得させるために, 香川県の万引きの実態や特徴に関するクイズを導入する。一般的に保護者が万引きに関してあまり多くの知識をもっていないことを考えれば(大久保・杉本・時岡他, 2012), クイズとその解説によって万引きに関する知識を獲得することは有意義な試みであると思われる。自分たちの地域における万引きの実態に関するクイズに解答し, その解説を聞くことによって, 正しい知識を得ることをねらいとする。次に, 万引きをした少年とその保護者の背景を考えてもらうために, 万引き防止のための啓発動画(大久保・時岡・有馬・松浦・高橋, 2012; 時岡・大久保・有馬, 2012)を用いて, 登場人物の心情やストーリー

の展開に関するグループディスカッションを導入する。他者とのディスカッションを通して, 万引きを行った少年とその保護者の背景や心情を考えることで, 保護者に求められる対応や関わり方についての多様な視点をもつことができると思われる。単純に万引きの問題を個人に焦点化せず, 背景を多様な観点から理解し, 幅広く対応策を考えていく姿勢を身につけることをねらいとする。なお, 青少年の万引きは, 中学入学後に急増するとされており(香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業, 2011), 予防的な観点からは早期の教育的働きかけが必要である。そのため, 今回は小学生の保護者を対象とする。

方法

参加者

香川県内の2つの小学校に通う児童の保護者115名(男性17名, 女性98名)が参加した。平均年齢は45.73歳($SD=11.40$)であった。参加者の内訳をTable 1に示す。いずれの学校でも, 万引きについて考える会というかたちでアナウンスをし, 自発的に参加した保護者を対象に教育プログラムを実施した。

実施時期

1つ目の小学校では2012年9月に実施し, 2つ目の小学校では2012年11月に実施した。いずれの学校においても体育館で行った。

教育プログラムの流れ

教育プログラムはワークシートに基づいて行った。ワークシートの前半には香川県の万引きに関するクイズとその解説, 後半には万引き防止の啓発動画(大久保・時岡他, 2012; 時岡他, 2012)の登場人物の写真と自分の意見等を書き込む欄が含まれていた。プログラムの概略

Table 1 参加者の内訳

	会社員	自営業	公務員	主婦	その他	合計
男性	4	2	5	0	6	17
女性	20	3	2	64	9	98
合計	24	5	7	64	15	115

Table 2 教育プログラムの大まかな流れ

項目	内容
①万引きに関する知識の確認 (10分)	万引きに関する○×クイズ (10問) に解答する。
②万引きの現状の説明 (10分)	クイズの内容に照らして、香川県における万引きの現状について調査データをもとに解説する。
③万引き防止啓発動画の視聴 (10分)	万引き防止啓発動画DVD青少年編「万引きはゲームじゃない」を視聴し、少年が万引きに至る経緯や万引き後の措置について知る。
④動画の振り返り—中学生の反応を考える (10分)	啓発動画をみた中学生がどのように感じたかを予想させ、実際の中学生の感想を紹介する。
⑤動画の振り返り—親の対応と心情を考える (10分)	3名の少年の母親の立場からそれぞれの対応の背景や心情について考え、グループでディスカッションを行う。
⑥保護者の万引き対応の特徴 (10分)	ワークシートをもとに、子どもの万引きに対する保護者の対応の特徴について解説する。
⑦万引き防止策の検討 (10分)	万引きを減らすために何ができるかを自分なりに考え、グループでディスカッションを行う。
⑧まとめ (10分)	万引き防止のために保護者の役割が重要であること、地域一丸となって対策を考えていく必要があることを確認する。
⑨アンケートの記入 (10分)	教育プログラムに関するアンケートを各自で記入する。

をTable 2に示す。プログラムは第二著者が実施し、全体の所要時間は約90分であった。

①万引きに関する知識の確認 香川県における万引きの実態について、先行研究（香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業，2011）での調査データをもとに作成した○×クイズ10問に各自で解答してもらった。クイズの問題例は、「香川県は全国でも万引きの少ない県である」「万引き犯は万引きが悪いということをわからずに万引きをしている」などである。

②万引きの現状の説明 参加者がクイズに解答した後、正解を確認し、解説を行った。その際、香川県は万引きが多い県であること、全件通報制が進んでいること、中学生の万引きは複数で行われやすいこと、万引きには周囲の人の対応が重要となること、などを確認した。

③万引き防止啓発動画の視聴 時岡他(2012)で作成された万引き防止啓発DVD青少年編「万引きはゲームじゃない」を視聴した。

④動画の振り返り—中学生の反応を考える 岡田他(2013)での結果をもとに、動画をみた中学生がどのような感想をもったかを紹介した。「万引きを私がするとお母さんや先生など、たくさんの人に迷惑をかけることがわかりまし

た」「万引きをしないためには親の教育が大切だと思った」など、親子関係に言及した感想を中心的に紹介した。

⑤動画の振り返り—親の対応と心情を考える ワークシートをもとに、動画の中で万引きをした3名の少年の母親について、それぞれの立場からその対応や心情について考えてもらった。まず、個人でワークシートに記入し、次に4～8名でのグループで意見を交換してもらった。

⑥保護者の万引き対応の特徴 ワークシートをもとに、普段の親子関係のあり方が万引きをした際の対応の仕方に関わることを解説した。

⑦万引き防止策の検討 青少年の万引きを防止するために、保護者の立場として何ができるかを考えてもらった。最初に、個人でワークシートに記入し、次に4～8名でのグループで意見を交換してもらった。

⑧まとめ 教育プログラムのまとめとして、青少年の万引き防止にとって保護者の役割が重要であること、万引きに対しては地域全体で対策を考えていく必要があることを確認した。

⑨アンケートの記入 教育プログラムに対するアンケートを各自で記入してもらった。

万引き防止のための啓発動画のあらすじ

動画では、3人の少年（哲郎、キョト、れん）が万引きに至ってしまうストーリーが描かれている。主人公は哲郎である。3人の力関係は、キョトがリーダー格であり、れんはキョトに追従し、哲郎がもっとも発言力が弱い立場にある。最初、じゃんけんによってキョトが万引きをすることになり、哲郎は戸惑いながらも2人についていく。3人で書店に入っていく、哲郎とれんが見張り役をするなか、キョトは万引きに成功して店を出る。その後、キョトがもう一度万引きを実行することを提案し、じゃんけんによって哲郎が万引きを実行する役になる。同じ書店に入って、哲郎は万引きをして逃げようとするが、店長に捕まってしまう。同時にキョトとれんも捕まり、3人一緒に書店の事務所に連れていかれる。書店の店長はその場で警察に連絡し、到着した2人の警察官によって3人の少年は警察署に連れていかれる。取調室で待っているときに、警察官から担任教師と保護者に連絡したことが告げられるが、れんの両親だけは仕事のために来られない。まず担任教師が現れ、3人を叱責する。次に、キョトの母親が登場し、万引きの事実を疑い、警察官に詰め寄る。ほぼ同時に哲郎の母親が現れ、警察官に対して土下座をして謝る。それを見た哲郎は、一緒に土下座をして謝り、二度と万引きをしないことを誓う。キョトとれんもしぶしぶながら万引きしたことをその場で謝る。その後、れんは担任教師と、キョトは母親と帰っていく。哲郎と母親は警察署を出たところで再度頭を下げ、警察官から万引きをすれば誰かが必ず見ているということを諭され、哲郎が返事をしたところで動画は終了する。全体の時間は約10分である。

効果測定のためのアンケート

①プログラム全体の印象 プログラム全体の印象を尋ねるために、大久保・時岡他（2012）、岡田他（2013）と同様に「よかった」「感動した」「勉強になった」「ひきこまれた」の4項目を用いた。プログラムの全体的な印象について、各項目に「1：全くあてはまらない」から「5：

非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

②万引きに関する実感 プログラムを通して、万引きの特徴や実態についてどれぐらい実感が得られたかを調べるために、大久保・時岡他（2012）、岡田他（2013）と同様の7項目を用いた（「万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した」「警察に通報することの重要性を実感した」など）。各項目に対して、「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

③万引きに対する態度 プログラムを通して万引きに対する態度をどのようにもったかを測定するために、岡田他（2013）で用いた万引きに対する態度を尋ねる項目を用いた。岡田他（2013）では、「万引きをした（しそうな）人へのかかわり」「万引きをしない効力感」「万引きに関する情報探索」「地域づくりへの意欲」の4下位尺度を用いていた。今回の教育プログラムは、青少年の万引きに対して保護者の立場を考えることが主旨であったため、「万引きをしない効力感」を除く3下位尺度を用いた（各3項目）。それぞれの項目に対して、「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

④感想 プログラム全体に対する感想や意見を自由記述で記入してもらった。

結果

プログラム全体の印象

プログラム全体の印象を尋ねる4項目について、記述統計量を算出した（Table 3）。その結果、「よかった」「勉強になった」は、平均値が4点を超過しており、「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と肯定的な回答をした参加者の割合は9割を超えていた。「ひきこまれた」については、平均値が3.96点であり、「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と肯定的な回答をした参加者の割合は約7割であった。「感動した」については、平均値が3.70点とやや低めであり、「どちらともいえない」と回答した参加者が3割ほどいた。

Table 3 プログラム全体の印象の記述統計量

	全くあてはまらない	あてはまらない	どちらともいえない	あてはまる	非常にあてはまる	Mean	SD
①よかった	1 (0.87)	1 (0.87)	6 (5.22)	57 (49.57)	50 (43.48)	4.34	0.70
②感動した	1 (0.87)	6 (5.22)	40 (34.78)	47 (40.87)	21 (18.26)	3.70	0.86
③勉強になった	1 (0.87)	2 (1.74)	5 (4.35)	50 (43.48)	57 (49.57)	4.39	0.73
④ひきこまれた	0 (0.00)	2 (1.74)	28 (24.35)	58 (50.43)	27 (23.48)	3.96	0.74

注. 数値は各選択肢の人数を示す（括弧内はパーセンテージ）。

Table 4 万引きに関する実感の記述統計量

	全くあてはまらない	あてはまらない	どちらともいえない	あてはまる	非常にあてはまる	Mean	SD
①万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した	0 (0.00)	1 (0.88)	5 (4.42)	73 (64.60)	34 (30.09)	4.24	0.57
②警察に通報することの重要性を実感した	1 (0.88)	0 (0.00)	0 (0.00)	50 (43.86)	63 (55.26)	4.53	0.60
③万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した	0 (0.00)	1 (0.88)	2 (1.77)	44 (38.94)	66 (58.41)	4.55	0.58
④万引きする側にも背景があることを実感した	0 (0.00)	0 (0.00)	7 (6.14)	59 (51.75)	48 (42.11)	4.36	0.60
⑤悪いということを知っているにもかかわらず万引きをしてしまうことを実感した	0 (0.00)	0 (0.00)	8 (7.02)	60 (52.63)	46 (40.35)	4.33	0.61
⑥万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (0.88)	29 (25.44)	84 (73.68)	4.73	0.47
⑦万引きをするとどういった措置（対応）が取られるのかを実感した	0 (0.00)	1 (0.88)	6 (5.26)	55 (48.25)	52 (45.61)	4.39	0.63

注. 数値は各選択肢の人数を示す（括弧内はパーセンテージ）。

万引きに関する実感

万引きに関する実感を尋ねる7項目について、記述統計量を算出した（Table 4）。その結果、すべての項目で平均値が4点を超過しており、「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と肯定的な回答をした参加者の割合は9割以上であった。特に、「警察に通報することの重要性を実感した」「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した」の得点が高く、1名を除いてすべての参加者が肯定的な回答をしていた。

万引きに対する態度

万引きに対する態度を尋ねる9項目について、確認的因子分析を行った（Table 5）。尺度作成時に想定した3側面を潜在変数、それぞれ3項目を観測変数とした。その結果、適合度はCFI=.95, RMSEA=.08と十分な値が示された

ため、想定した3因子に対応する3下位尺度として使用することとした。1つ目の下位尺度は、「万引きをした（しそうな）人へのかかわり」であり、「万引きをしてしまった人がいたら、できる限りその人のことを理解してあげたいと思う」など、万引きをした人やしそうな人に対する積極的なかかわりを示す3項目からなる（ $\alpha=.77$ ）。2つ目の下位尺度は、「万引きに関する情報探索」であり、「万引きの背景や現状のことを常に知っておきたいと思う」など、万引きに関する情報を収集しようとする態度を示す3項目からなる（ $\alpha=.73$ ）。3つ目の下位尺度は、「地域づくりへの意欲」であり、「万引きをしても立ち直ることができる地域であってほしいと思う」など、万引きのない地域づくりに対する志向性を示す3項目からなる（ $\alpha=.79$ ）。それぞれ3項目の合計得点を下位尺度得点とし

Table 5 万引きに対する態度の確認的因子分析結果

	因子 負荷量	Mean	SD
万引きをした（しそうな）人へのかかわり			
①万引きをしてしまいそうな人がいたら、その人の気もちや背景をわかってあげたいと思う	.70	3.94	0.73
②万引きをしてしまいそうな人がいたら、そうしなくてもいいようにかかわってあげたいと思う	.74	4.05	0.65
③万引きをしてしまった人がいたら、できる限りその人のことを理解してあげたいと思う	.74	4.03	0.74
万引きに関する情報探索			
④万引きに関するニュースや話題に目を向けていきたいと思う	.68	4.23	0.56
⑤万引きの背景や現状のことを常に知っておきたいと思う	.90	4.15	0.58
⑥機会があれば、万引きのことを他の人と話し合ってみたいと思う	.57	3.96	0.68
地域づくりへの意欲			
⑦万引きが起りにくい社会や地域を作っていきたいと思う	.71	4.45	0.61
⑧まわりの人が万引きをしなくてもいいような社会になればよいと思う	.81	4.65	0.53
⑨万引きをしても立ち直ることができる社会や地域であってほしいと思う	.75	4.65	0.52

Table 6 万引きに対する態度の記述統計量

	Mean	SD
万引きをした（しそうな）人へのかかわり	12.02	1.76
万引きに関する情報探索	12.32	1.48
地域づくりへの意欲	13.74	1.39

で算出した（Table 6）。

各下位尺度の理論的な中央値は9点である（各項目に「3：どちらともいえない」と回答した場合）。この9点と3下位尺度の平均得点との差についてt検定を行ったところ、いずれも差は有意であった（ $t=18.42\sim 36.18, p<.001$ ）。万引きに対する態度とプログラム全体の印象、万引きに関する実感との関連

万引きに対する態度とプログラム全体の印象との相関係数を算出した（Table 7）。万引きに関する情報探索と地域づくりへの意欲は、プログラムの全般的な印象の4項目すべてと有意な正の相関を示した。万引きをした（しそうな）人へのかかわりは、「よかった」と有意な正の相関を示した。

万引きに対する態度と万引きに関する実感との相関係数を算出した（Table 7）。地域づくりへの意欲は、万引きに関する実感7項目のすべてと有意な正の相関を示した。特に、「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した」との相関が強かった。万引きに関する情報探索も、7項目すべてと有意な正の相関を示した。万引きをした（しそうな）人へのかかわりは、3項目と有意な正の相関を示したが、全般的に相関係数の値は小さかった。

プログラム中の参加者の様子

いずれの学校においても、プログラムに対して大部分の参加者は関心をもって参加していた。グループでの話し合いは、もともと面識のある保護者同士で座っていたこともあり、活発

Table 7 万引きに対する態度とプログラム全体の印象, 万引きに関する実感との相関係数

	万引きをした(し そうな)人への かかわり	万引きに関する 情報探索	地域づくりへの 意欲
①よかった	.21*	.41***	.36***
②感動した	.10	.21*	.19*
③勉強になった	.13	.29**	.35***
④ひきこまれた	.14	.39***	.35***
①万引きには世代ごとに特徴的な背景があるこ とを実感した	-.03	.19*	.31***
②警察に通報することの重要性を実感した	.02	.20*	.36***
③万引き対策は地域社会全体で取り組むことを 実感した	.13	.26**	.44***
④万引きする側にも背景があることを実感した	.25**	.25**	.35***
⑤悪いということを知っていても万引きをし てしまうことを実感した	.39***	.34***	.36***
⑥万引きをした際にまわりの人の対応が重要で あることを実感した	.20*	.36***	.55***
⑦万引きをするとどういふ措置(対応)が取ら れるのかを実感した	.06	.28**	.28**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

に意見交換が行われた。アンケートの自由記述では、「今回、万引きについて知ることができ、また周囲の人ともワークができてよかった。考えるよいきっかけになった」「グループで話ができ、他のお母さんたちの考えがよくわかりよかった」などの感想があり、他の保護者との意見交換が、参加者にとって意義深く、関心をひくものであったと思われる。DVD視聴の際には、体育館での上映ということもあり、やや映像が見にくい状況であったものの、ほとんどの参加者が集中して真剣に鑑賞する様子がみられた。アンケートに、「DVDの作成内容が、すぐにひきこまれわかりやすくよかったです」との感想があり、動画を用いたことで参加者が興味をもってプログラムに参加できたものと思われる。

考察

本論文では、小学生の保護者を対象に、青少年の万引き防止のための教育プログラムを作成し、その実践事例を報告した。教育プログラム

の構成は、①万引きに関する正しい知識を獲得すること、②万引きをした少年とその保護者の背景について自ら考えること、という2つを柱とした。以下に、教育プログラムに関するアンケートの回答をもとに教育プログラムの効果を検討していく。

プログラム全体の印象について、参加した保護者からは概ね肯定的な評価が得られた。特に、「よかった」「勉強になった」の2項目については、9割以上の参加者が肯定的な回答をしていた。プログラムの内容が参加者にとって肯定的なものとして捉えられ、かつ学習効果もあったと考えられる。自由記述では、「万引きについて今まであまり考えたことがなかったので、よい勉強になりました」「万引きについて考えるよい機会になりました。(普段はそんなに考えることがなかったので)」などの感想がみられ、日常生活のなかで万引きについて考える機会は少なく、プログラムは新奇なものとして経験されたと思われる。そのため、今回の教育プログラムにおいて、万引きの実態を知識として獲得し、他の保護者と意見を交換し合うこ

とで、「勉強になった」という感想をもったものと考えられる。

万引きに関する実感についても全般的に肯定的な回答が得られた。特に、「警察に通報することの重要性を実感した」「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した」については、参加者のほぼ全員が肯定的に評価していた。万引きの再犯防止にとって、警察への通報が重要であることは、今回用いたDVDでも明確に述べられており、実際に香川県でも全件通報制が推奨されている。これらの点が参加者に伝わり、通報の重要性について肯定的な回答が得られたものと思われる。また、まわりの人の対応については、DVDの内容と他の参加者とのディスカッションの効果が大きいと考えられる。DVDのなかで、万引きに関わった3人の少年の保護者はそれぞれ異なる対応をしていたため、保護者の影響の大きさは実感しやすかったと思われる。同時に、そのDVDの内容を踏まえて、他の保護者の考え方を聞くことで、保護者の対応の重要性を強く感じたのであろう。保護者の対応や子どもとの関係が万引きに影響することを考えれば(大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富他, 2012)、この点に効果がみられたことは非常に有意義なものであるといえる。

万引きに対する態度として、「万引きをした(しそうな)人へのかかわり」「万引きに関する情報探索」「地域づくりへの意欲」という3つの側面での効果を想定した。いずれの側面についても平均得点は高く、教育プログラムの効果は大きかったと考えられる。特に、地域づくりへの意欲は得点が高かった。この側面がプログラム全体の印象や万引きに関する実感のすべての項目と正の相関を示したことと併せて考えると、プログラムに対して肯定的な印象をもち、多くの知識を実感した保護者ほど、万引き防止の重要性を感じ、万引きのない地域を望むようになったと考えられる。自由記述では、「自分の子どもだけ見るのではなく、友だちも含めて地域の子もたちという大きな枠で見ることが大事だと思いました」「地域で声かけ、あいさ

つをすることは大事だと思います」という感想もみられ、自分の家庭や子どもとの関係を超えて、地域全体を通して考えていく視点をもった参加者もいたと思われる。万引きをした(しそうな)人へのかかわりについては、ほとんどの保護者は自分の子どものことを想定して回答したかもしれない。プログラムを通して、自分の子どもが万引きをした場合にもその背景を理解しようという態度をもったことが窺える。万引きに関する情報探索についても高い得点であったが、この側面に効果がみられたことは、今回のプログラムの効果の持続性を考えるうえで非常に重要である。保護者自らが万引きに関するニュースや動向に目を向けていくことに加えて、万引きについて考える場を継続的に提供していくことも有意義かもしれない。

また、今回の教育プログラムは、参加した保護者は子どもとの関係のあり方を見つめ直すきっかけにもなっていたと思われる。アンケートの自由記述では、「息子とのかかわり方をよく考えてみたいと思います」「子どもとのかかわりの大切さを考え直すことができました」などの感想がみられ、万引きを通して自身の子どもの対するかかわり方について考えた保護者も少なくなかった。加えて、「これを機会に家でも万引きについて話してみたいと思いました」「子どもに今日の話をうまく伝えられたらいいと思う」など、プログラムの内容を子どもに伝えたいと感じている保護者もいた。保護者に対する働きかけは、青少年の万引き防止とともに子どもとの関係を振り返るきっかけにもなり得るものといえる。

今後の課題は、より多様な対象者に対して教育プログラムを行っていくことである。今回は万引きの予防という観点から、小学生の保護者を対象にプログラムを実施した。一方で、万引きの再犯防止を考えるならば、中学生や高校生の保護者などを対象とした実践も必要である。中学生の保護者を対象にした場合、今回よりも実際に子どもが万引きをした経験がある保護者の割合が多くなると考えられる。そういった状況を踏まえて、どのような実施方法がもっとも

効果的であるかを検討していくことが必要である。また、今回の対象者はほとんどが女性であった。青少年の非行には父親との関係も影響するため（小保方・無藤，2005），男性の保護者を対象とした実践も行っていく必要がある。

引用文献

- 香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業（2011）．万引き防止対策に関する調査報告書 香川大学・香川県警察
- 小林寿一（2003）．我が国の地域社会における非行統制機能について 犯罪社会学研究, 28, 39-54.
- 小林寿一（2008）．少年非行の原因と説明理論 小林寿一（編著）少年非行の行動科学—学際的アプローチと実践への応用 北大路書房 pp. 20-51.
- Krasnovsky, T., & Lane, R. C. (1998). Shoplifting: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior*, 3, 219-235.
- 岡田涼・大久保智生・時岡晴美・七條正典・松浦隆夫・大前和弘・三好一生（2013）．中学生を対象とした万引き防止のための教育プログラムの開発と実践 香川大学教育実践総合研究, 26, 61-72.
- 小保方晶子・無藤隆（2005）．親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, 16, 286-299.
- 小保方晶子・無藤隆（2006）．中学生の非行傾向行為の先行要因—1学期と2学期の縦断調査から心理学研究, 77, 424-432.
- 大久保智生（2012）．青少年の万引きに対する規範意識：香川県子ども安全・安心万引き防止事業の取り組みから 青少年問題, 646, 44-47.
- 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀（印刷中）．万引きに関する心理的要因の検討：万引き被疑者を対象とした意識調査から科学警察研究所報告, 62
- 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀・永富太一・時岡晴美（2012）．万引き被疑者における万引きに関する心理的要因間の関連の検討：家族および友人関係と攻撃性が万引きの心理に及ぼす影響 子育て研究, 2, 13-20.

- 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・宮前淳子・宮前義和・岡田涼・七條正典（2012）．一般の青少年と高齢者の万引きに関する心理的要因の検討：世代によって万引きへの意識はどのように異なるのか 香川大学教育学部研究報告第I部, 138, 1-10.
- 大久保智生・杉本ゆか・時岡晴美・常田美穂・西原和代（2012）．保護者は子どもの万引きをどのようにとらえているのか—保護者の万引きに関する心理的要因の検討— 香川大学実践総合研究, 25, 69-79.
- 大久保智生・杉本ゆか・常田美穂・高橋護・岡田涼・時岡晴美（印刷中）．万引きの再犯防止につながる保護者の対応の検討—親子関係が万引きした際の対応に及ぼす影響—
- 大久保智生・時岡晴美・有馬道久・松浦隆夫・高橋護（2012）．万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの参画による青少年の意識変化について（その2）—動画の視聴者の評価と参画した大学生と中学生の意識調査から— 香川大学教育実践総合研究, 25, 57-68.
- 朴信永（2012）．子育てと親の省察 湯澤正通・杉村伸一郎・前田健一（編著）．心理学研究の新世紀3 教育・発達心理学 ミネルヴァ書房 pp. 432-445.
- 戸田まり（2009）．親子関係研究の視座 教育心理学年報, 48, 173-181.
- 時岡晴美・大久保智生・有馬道久（2012）．万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの参画による青少年の意識変化について（その1）—青少年編「万引きはゲームじゃない」のDVD制作による啓発効果を中心に— 香川大学教育実践総合研究, 24, 153-160.

付記

本研究は、平成24年度公益財団法人マツダ財団マツダ研究助成（研究代表者：大久保智生）を受けて行ったものである。